

What's up now!

SJホットインタビュー



Photo Courtesy of Universal Classics & Jazz

Valerie Joyce

バレリー・ジョイス (ボーカル)

まわりの人々に "You have a nice voice"
と言われて自信がたったのです

●インタビュー・文 杉田宏樹

アメリカ人の父親と日本人の母親の間に日本で生まれたバレリー・ジョイスは、これまでにあまり例のないタイプのニュー・スターである。横浜のインターナショナル・スクールで学び、音楽大学進学のため渡米。その後初めてジャズと出会う。

「クラシックをずっと学んでいたけれど、まだはっきりと自分がどのように進みたいのかわかっていなかった頃のこと。大学の練習室からビッグ・バンドの音が聞こえてきて、素晴らしいと思った。ピアノの先生の勧めでジャズの合唱団に入り、それがきっかけでジャズを学び始めました。高

校までは人前で歌うことが恥ずかしかったけれど、まわりの人々に "You have a nice voice" と言われて自信がたったのです」

最初はアクスター・ゴードン、モヒニナス・モンク、ビル・エバンス等のインスト・ジャズに惹かれ、自分で歌い始めるとシャーリー・ホーンやチェット・ベイカーといったボーカル・アルバムも好んで聴くようになった。大学卒業後の94年にシアトルへ移り、本格的に活動をスタート。ソロトリオ編成でカフェやレストランで歌い、ビッグ・バンドでピアニストを務める。そんな中でチャンスは訪れた。「きっかけは以前、自主制作したCDが雑誌で取り上げられたこと。それがプエルトリコのラジオDJを通じて、キーボード&アレンジャーのカルロス・フランゼッティに伝わり、チェスキーとめぐり合うことができた。こういう形でレコード会社を紹介してもらえたことは幸運だったと思います」

バレリーのメジャー・デビュー作『ニューヨーク・ブルー』はスタンダード・ナンバーを柱に、ビートルズやジミ・ヘンドリックスもカバー。ピアニストのアンディ・エズリンがアレンジも手がけ、作品に最大級の貢献を果たしている。聴けばわかるように、バレリーはスモーキーで太い独特の声質の持ち主だ。その歌唱スタイルは近年ジャズ・ボーカリストにも多大な影響を与えているジョニー・ミッチェルに通じるものである。

「ジャズに出会って、ボーカリストになりたいと思った。それ以前からピアノを勉強していたからこそ、ボーカリストの道へと進めたのだとも思う」とバレリーは流暢な日本語で語る。バラードを主体としたプログラムは夜のイメージ。録音地とバレリーが好きな音楽を組み合わせたアルバム名が、作品全体の雰囲気を表している。大いなる可能性を秘めた歌姫の登場だ。